

4. 「学生による授業評価アンケート」全学的観点から見た現状と今後の課題

全学部のアンケート結果の「授業の状況」の各項目で、全体平均が4.2点以上あり、高い数値を示している。「学習の状況」の(8)「授業の内容は理解できた」では、全体平均が4.2点、(9)「やむを得ぬ理由以外では遅刻・欠席をしなかった」では、全体平均が4.4点と高い数値を示しているものの、(10)「この科目について授業以外1週間あたり、どのくらい学習しましたか」の項目では、全体平均が2.5点であり、低い数値を示している。「学習成果」では、各項目で3.9点以上あり、比較的高い数値を示している。

次に授業形態別のアンケート結果の(17)(18)(19)の各項目では、4点前後であり、比較的高い数値を示している。それぞれの授業形態別に比較すると、「学習状況」(10)「この科目について授業以外1週間あたり、どのくらい学習しましたか」で、大きく結果が異なっている。「講義科目」では、2.4点、「演習科目」では2.7点「実習科目」では3.1点「卒業研究科目」では3.5点となった。こうした結果に鑑みれば、科目の課題の明確さに比例し、より高い数値を示していることが推測できるが、全体のアンケート結果において、低い数値であり、授業外での学習時間の確保が今後の課題としてあげられる。

開講所属では、「英語英文学科専門教育科目」では、各項目において、全体の平均値と大差はないが、(10)「この科目について授業以外1週間あたり、どのくらい学習しましたか」の項目で、3.0点と、比較的高い数値を示している。「人間文化学科専門教育科目」では、各項目において、全体の平均値と大差はないが、「学習成果」の項目で、全体の平均値を上回る結果を示している。「心理学部専門教育科目」では、各項目において、全体の平均値と大差はないが、(15)「この授業で、「思考・解決する力」が向上した」の項目で、5点が39.4%を占め、比較的高い数値を示している。「生活福祉学部専門教育」では、各項目において、全体の平均値と大差はないが、(14)「この授業で、「創造・発信する力」が向上した」の項目で、4.0点と比較的高い数値が示されている。次に、「人間文化学部共通科目」では、全体の平均値と大差はないが、(10)「この科目について授業以外1週間あたり、どのくらい学習しましたか」の項目で2.0点と比較的低い数値を示している。しかしながら、科目数と回答者数が極端に少ないため、結果を慎重にとらえる必要があるだろう。「共通教育科目」では、「学習成果」以外の項目において、全体の平均値と大差はないが、「学習成果」の各項目で、若干平均を下回る結果となった。「資格関係」の科目では、「学習成果」以外の項目において、全体の平均値と大差はないが、「学習成果」の各項目で、全体の平均値を若干上回る結果となった。開講所属別のアンケート結果では、概して全体の平均値と大差はないが、予習が必要となる語学科目などの多い学科に関して、(10)の項目で高い数値が出る傾向にあると考えられる。一方、「資格関係」の科目において、「学習成果」で高い数値が出ているが、比較的目的や指標を明確化しやすいということに起因していると推察できよう。

最後に、全学のアンケート結果に鑑みると、ほとんどの項目において、非常に高い数値が示されているが、「高すぎる」という意味において、望外な結果であるとの印象を受けざるを得ない。アンケートの中に粗慢な回答を含んでいることは否定できず、その可能性も考慮すべきである。したがって、集計結果をより冷静に判断することが求められる。今後の課題として、アンケートの実施方法や実施の際の指導などを含め、「授業評価アンケート」のあり方について、根本的に見直し、対策を行う必要があるだろう。

文責：大川 淳（人間文化学部 英語英文学科 FD 委員）